



Title	変わらない活動から生まれた新たなコミュニティ : 桜塚校区福祉会 小さなくりの木会
Author(s)	石塚, 裕子
Citation	未来共生学. 2018, 5, p. 288-300
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68220
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

変わらない活動から生まれた 新たなコミュニティ

桜塚校区福祉会 小さなくりの木会

石塚裕子

大阪大学未来戦略機構第五部門特任助教



写真1. 小さなくりの木会ミニ演奏会の様子

名称：桜塚校区福祉会 小さなくりの木会

場所：豊中市北桜塚

設立年：1994年

活動内容：地域のボランティアによる、認知症の人など多様な人を受け入れるミニ・デイサービスを月に2回実施している。

1. 高齢社会におけるケアとまちづくり

我が国の人口は2008年に1億2808万4千人でピークを迎え、それ以降、死亡数が出生数を定常的に上回るようになり、2015年現在、人口1億2709万5千人、65歳以上の人口割合26.6%となった¹。また、世帯の小規模化、未婚化・晩婚化により、2015年時点の最も多い世帯は「単独世帯」となっている。将来推計人口では、今から約50年後の2065年には総人口8807万7千人、65歳以上人口割合は38.4%となり、人口割合の変動は鈍化すると予測されている²。

このように人口・世帯構成が変化し、老老介護、ダブルケア³、担い手不足など課題が山積する中で、家族が担ってきた役割、地方自治が対応してきた役割の一部を地域コミュニティが担わなければならない時代となっている。

量的なマンパワーは限られ、コミュニティが希薄化していると言われる中で、市民ひとりひとりの活動の質をいかに計画的に担保するかが、まちづくりに求

められている。高齢者や障害者など要介護者と位置づけられる人々をケアされる対象だけに位置づけるのではなく、地域社会の構成員として存在を認め合い、支えー支えられる双方向の協働体験を通じて関係性を醸成する機会や居場所が地域社会に必要である。そしてその多様なひとびとの活動は施設内や敷地内に留まることなく、都市空間へ溢れ出すことによって、はじめて社会を豊かなものにするという(後藤 2018)。

これからのまちづくりは、これまでのような外発的なプランニングではなく、内発的なニーズにもとづく、既存概念に捕らわれないデザインが必要である。まずは地域の現場でどのような人々が、どのような具体的な場所、空間で、どのような活動をしているのか、丁寧に見ていくことから始めなければならない。

本稿では、大阪府豊中市桜塚校区におけるミニデイサービス「小さなくりの木会」のとりくみから、高齢社会におけるケアとまちづくりのヒントを探してみたい。

2. 小さなくりの木会と未来共生プログラム

小さなくりの木会とは、豊中市の桜塚校区福祉会の活動の一つとして、地域住民ボランティアが運営するミニデイサービスである。1994年から活動を開始し2017年2月現在、500回を重ね23年間も継続している。校区福祉会とは、豊中市社会福祉協議会の内部組織としておおむね小学校区単位に結成された民間の自主的な団体である。校区内の身近な福祉問題を解決するために全校区に組織されている。高齢者や障害者などの要介護者の見守りや声かけ活動、給食サービス、ふれあいサロン、子育てサロン、ミニデイサービスなど様々な事業や交流行事を実施している。

小さなくりの木会と未来共生の出会い、未来共生3期生(当時)の眞浦有希が、公共サービス・ラーニングで豊中市社会福祉協議会にお世話になり、豊中市老人介護者(家族)の会に参加させていただく機会を得て、そこで、小さなくりの木会の代表である西野玲子さんにお声かけいただいたことである。

眞浦は保健学を専攻し地域における高齢者ケアを研究関心としていたことから、地域と高齢者(要介護高齢者・認知症高齢者)の共生を考えたいとの思いを

もち、2年次に実施されるプロジェクト・ラーニングの企画を提案した。

プロジェクト・ラーニングは、『未来共生学』第4号に詳述しているが、現場のひとびとと協働でプロジェクトを立案し、実施することを通して、共生をめぐる諸問題に実践的に対処する経験を積むことを狙いとする授業である。眞浦の企画に賛同し、伊藤莉央、小泉朝未、西澤歩未の4名の履修生は、解決すべき諸課題を見つけようと、小さなくりの木会に参加し、活動をはじめた。

2. 小さなくりの木会の活動

2.1 活動の経緯

会の代表を務める西野は、夫の祖母や若年性認知症の義母を介護した経験を通じて、地域における託老・託老所の必要性を強く感じ、豊中市社会福祉協議会や桜塚校区福祉会の助言、協力を得て小さなくりの木会を手探りではじめた。

開設当時、介護保険制度はなく、「介護は家族だけの問題、自分たちで抱え込む時代だった」と西野は振り返る。そのような中、当時の桜塚校区福祉会の会長の「地域で介護を考えたい」という発意から、西野は子育てなどを通じて気心の知れた仲間達を募って介護支援グループをつくり、地域の民生委員と協働しながら開設準備を進めていった。しかし、「安全面を懸念する声、場所探し、経費の問題など苦難の道のりでした」と語る。活動当初は、ボランティアだと責任がとれないなどを理由に場所を借りることができず、西野の自宅でミニデイサービスをはじめた。その後、北桜塚自治会の理解が得られて現在の会館で活動できるようになった。

活動をはじめてから、西野は通信教育や大学で介護や福祉を学び、介護福祉士やケアマネジャーなどの専門資格を取得しながら試行錯誤を繰り返し、仲間達と一緒に考えながら現在の運営スタイルを確立していく。西野が最も大切にしていることは、利用者も家族もスタッフも対等な立場であることである。

利用者や家族さんに「お世話になります」と遠慮させないこと、私たちスタッフに大切なお客様を委ねていただいているという気持ちを共有しています。お互いの信頼関係が一番だと思っています。

介護の現場では、「当事者主権」(上野 2008)が近年、主張されながらも、支援関係に内在する非対称性をジレンマとして常に抱えている。小さなくりの木会では、支える一支えられる関係をどのように構築し、活動を継続してきたのであろうか。

2.2 活動のようす

2017年現在、24年目を迎えた小さなくりの木会は、原則、第2、第4の月曜日に開かれる。1日の活動は次のような流れである。

午前9時頃からスタッフが集まり会場設営を始める。北桜塚会館の倉庫に保管している絨毯や座布団、足置き台、カラオケ用のCD、うちわやボール、キーボードなど、長年の活動経験から厳選された道具が揃っている。利用者さんの体調や好みを把握しているスタッフは、「ここには足置き台を。ここにはキーボードを」と心地よい環境を整えていく。

設営が終わると、スタッフ会議という名のお茶会がはじまる。そうこうしているうちに、午前9時半頃から送迎スタッフが戻り、利用者を出迎える。「おはよーさん」、「今日のファッションは素敵やねえ」、「娘さんのところへ行くと聞いていたけど、楽しかった？」など、久しぶりに会う友人同士のような会話が弾み、お茶会の参加者がどんどん増えていく。

そして、その日の参加者が概ね揃った段階で、西野が進行役となり、近況報告や知り得た情報などを、マイクを廻して利用者もスタッフも全員が話す。話題はなんでも構わない。ある日は、認知症の妻を介助する男性参加者が、100円ショップのグッズを使ったトイレのリフォームノウハウを披露していた。

西野の声かけで、大きなくりの木の下での替え歌に振りをつけて、みんなで歌い、開会する。

♪ 小さなくりの木の下で
あなたとわたし 仲良く あそびましょう
小さなくりの木の下で♪

開会した後は、元看護師だったスタッフが血圧チェックをしたり、音楽好き



写真2. 小さなくりの木会 昼食時の様子

の利用者とスタッフがカラオケをしたり、スタッフと利用者が童心に戻り、ボール遊びを楽しんだり。

中には、参加している人の名前を忘れないようにとメモをとっていく利用者さんがいたり、各々に時間を過ごす。炊事場では、スタッフが昼

食の“おつゆ(お吸い物)”の準備を進めている。

午前11時半を過ぎると昼食の時間である。地域のお店に注文した仕出し弁当と手づくりの“おつゆ”をいただく。穏やかな雰囲気が流れる会場での昼食は、“おつゆ”と同じくあたたかい時間である。

午後は、午前と同じように各々に思い思いの時間を過ごす時もあれば、音楽サークルの演奏会などが開催される日もあり、近所の授産施設からお菓子やうどんなどの販売タイムが設けられる時もある。そして、午後3時頃になると「また再来週に」と声をかけあって利用者は帰宅し、スタッフは後片付けをして解散する。利用者もスタッフも、たくさんおしゃべりをし、笑い、ともに過ごした時間に満足感や達成感を感じたような表情で帰宅するのが印象的である。西野が大切にしている「利用者も家族もスタッフも対等の立場であること」を体現する場所と時間が23年間も続けられている。

2.3 制度ができて変わらない活動

2000年4月に介護保険制度がスタートし、介護サービス事業者は年々増え、今では、車いすに乗った高齢者がヘルパーに介助され、デイサービスや通所型リハビリテーション施設に通う様子は、当たり前風景となった。様々な制度やサービスが充実する中で、小さなくりの木会は役目を終えたのではないかと思いつつ、次のような想いで西野とその仲間達は活動を続けてきた。

デイサービスにつながらない方々の第一歩として、つながった後も家庭的な雰囲気を楽しみに来られる方も多く、最近では家族ぐるみの参加も増え、まだまだ会の役割や必要性を感じています。またスタッフ自身の高齢化により、行き場所・活動場所としての役目も果たしながら、今日に至っております。

新自由主義に基づく構造改革政策の推進の結果、人々の生活を不確実化していくとともに、その不確実性に対処するための基盤となる連帯関係のネットワークを不安定化させ、人々の抵抗力を無力化しているという(似田貝 2012)。連帯関係のネットワークの貧弱性が表れやすい災害の現場では、災害が起こるたびに障害のある人、高齢者、子どもなど社会的に弱い人への配慮ができず、様々な課題が噴出する。2016年4月に起こった熊本地震の現場でも多くの障害者が一次避難所に避難できなかった。その理由として「最近の福祉は、近所の人がかかわってはいけなサービスになってしまっている。専門化することは必要であるが、専門化することで、一般の人を遠ざけてしまい、地域福祉力の低下を招いている」という(石塚 2017)。

介護保険制度、障害者自立支援法など法制度が充実する中で、居宅介護や重度訪問介護、行動援護、移動支援といった福祉サービスメニューは充実したが、介助や支援が賃労働の場だけになり、さまざまなケアの場所と時間が地域コミュニティと疎遠になっている。地域コミュニティの中で高齢者や障害者など多様な人々との協働の場所と時間が共有されず、人々のつながりに隙間が広がっている。

そのような中で小さなくりの木会の「変わらない活動」は、2017年現在、累計150人もの人々に利用され、虚弱な方や若年性をはじめ様々な認知症の方、目の不自由な方、知的障害、身体障害、ひきこもりの人など、多様な人々に利用されてきた。その利用者とスタッフがともに過ごした場所と時間に、地域コミュニティの隙間を埋めるヒントが詰まっている。

2.4 変わらない活動の大切さへの気づき

履修生の活動報告書には、プロジェクトを企画、実施する過程での苦悩が次

のように記されている。

どのようなプロジェクトを行うのかについて、当初はボランティアの担い手不足などの解決策としての広報活動や、利用者・家族とボランティアが共に参加できるようなワークショップを、講師を招聘して行うなど考えていた。しかし、メンバー自身はミニデイサービスに参加するなかで、広報活動や単発的なイベントを持ち込むことへの違和感を覚え始めていた。参加者の生活の場、生活の一部としての活動に対して、外部から期間限定的に訪れた学生が、「問題を解決する取り組み」と称する活動を持ち込むことへの違和感である。

プロジェクトとは、何らかの目標を達成するための計画を指す。履修生が悩んだように、プロジェクトは、将来目標のために問題を解決するために働きかけることと捉えがちである(図1)。一方でプロジェクト(Project)の語源は、ラテン語の pro + jacere to throw⁴であり、その意味は「前方(未来)に向かって投げかける」となる。この「投げかける」方法は複数ある。

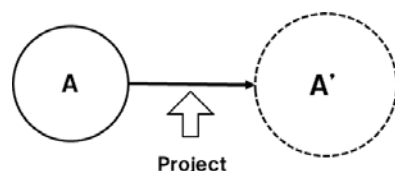


図1 問題解決型プロジェクト

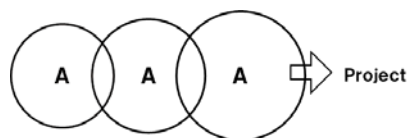


図2 未来伝達型プロジェクト

小さなくりの木会には、担い手の高齢化や会場の継続的な確保など様々な課題を抱えている。しかし、課題を抱えつつも継続している活動の中に、未来をよりよくするヒントが蓄えられていることに、履修生は、会の活動に参加する中で感じ、気づいたのである(図2)。

そして、履修生は、活動500回を記念するメッセージ集を作成、発行するという着想に至り、利用者、利用者の家族、関連機関からメッセージを収集、スタッフへのインタビューを行い、記録し、記念誌を完成させた。

3. 変わらない活動から生まれているもの

3.1 「支える—支えられる」という関係の流動性

現在、小さなくりの木会の利用者の中には、かつてはスタッフとして活動していた人が複数いる。高齢になったため、認知症を患ったためと理由はさまざまである。

一般的に「支える—支えられる」の関係は、一方通行で固定化しやすい。このため、支える側から支えられる側に立場が変わった場合、不甲斐なさや、気恥ずかしさ、遠慮などを感じやすい。しかし、小さなくりの木会のある利用者は「私は高齢になって足腰が弱くなり、スタッフとしては参加できなくなったけど、今は利用者として、この小さなくりの木会を支えているつもり」と語っていた。

支えられる側は、高齢である、身体に障害がある、知的・精神に障害があるなどカテゴライズされやすいが、そのカテゴリーは絶えず線が引きなおされるダイナミックな差異化のプロセスとして、暫定的に捉えることが重要であるという(熊谷 2010)。

小さなくりの木会は、時間の経過や心身の変化に伴いカテゴリーが変わっても受容され、「支える—支えられる」の関係が自然に流動する場になっている。

小さなくりの木会に参加した履修生をはじめ、利用者の家族、スタッフが共通して感じる、小さなくりの木会の特徴は「誰が利用者で誰がスタッフかわかりにくい」ということである。履修生が作成した記録誌には次のようなメッセージが掲載されている。

ここ和気あいあいと、ボランティアさん、利用者さん関係なくおしゃべりができますね。(利用者)

この「小さなくりの木会」には、お世話される人・お世話する人がお互いに喜びを感じる何かがある、多分このイベントそのものではなく、全体的な流れ・雰囲気ではと思っています。(利用者の家族)

誰がお客さんで誰がボランティアかわからないような、そんな賑やかななかで、みんなが見守っている。(スタッフ)

小さなくりの木会では、スタッフさんが利用者さんと一緒に、いつも楽しみながら活動に参加している様子が印象的です。スタッフさんが「楽しい！」と思い、笑顔で活動に参加していることが、利用者さんの笑顔と23年間の活動継続の秘訣なのかもしれません。(履修生)

西野は、「来ている人、みんなの顔が輝いてはりますね、顔がね、あんなに楽しそうに」と言い、西野の顔も輝く。利用者、利用者の家族、スタッフそれぞれに輝く場面があり、カテゴリーが変わっても、変わらずとも、支える一支えられる場面が流動するのが、小さなくりの木会なのである。

3.2 ともに過ごした時間がつなぐコミュニティ

小さなくりの木会には、長年、地域の一員として会を支えてきたが、90歳を超えて超高齢となり、やむを得ず地域を離れ、ケアハウスに入居した利用者がいる。また、介護をしていた家族のライフステージの変化や転勤などにより、単身居住となったため地域外のグループホームに入所した若年性認知症の利用者もいる。さらに、桜塚校区には住んでいないが、地域外から参加するスタッフが声をかけて一緒に通う、若年性認知症の利用者もいる。このように小さなくりの木会には、地域＝桜塚校区で生活はしていないが、地域住民と変わらずに会に参加する利用者、スタッフが複数いる。

小さなくりの木会は、どのような「コミュニティ」なのか？

近年、特に東日本大震災以降「コミュニティ」に過度とも言える期待が託されている。それは、市場や国家への不信、個人化が進みリスクに対する緩衝材が失われる中で、競争や成長に定位するのではない他者との関係や、活動様式としての「コミュニティ」を人々が志向する傾向にあるからである(齋藤 2013)。

コミュニティには、コミュニティとそれに関わる人々の関係という観点から3つの特徴があるという。一つは、人々は複数のコミュニティに同時に関わっており、特定のコミュニティに排他的に帰属しているのではないということ。二つめは、コミュニティは一過的な関係としてではなく相互行為の反復のうへに成立する持続性のある関係と認識されていること。そして、三つめは、コミュニティは特定の目的を達成するための道具的な集団ではなく、それに関わる者

にとって居場所ともなる、承認欲求を応える場になっていることである(齋藤 2013)。

小さなくりの木会は、桜塚校区といういわゆる地縁コミュニティを基盤とした、介護という目的のために生まれた、溝口(1996)のいう「つながりの公⁵(アソシエーション)」であるが、23年もの継続した活動の中で地縁だけではなく、特定の目的を達成するためだけでなく、もう一つの居場所ともいえる第三のコミュニティを形成してきたようだ。

人間は、血縁関係と社会関係とが同等の大きさの意味をもつことが、他の生物と異なる人間固有の独自性であるといい、人間は「ケアする動物」であるため、ケアへの欲求を持ち、ケアという行為を通じて、ケアを行っている人自身が、むしろ力を与えられ、充足感や統合感を得るという(広井 2011)。小さなくりの木会では、利用者もスタッフも一人ひとりに役割があり、互いにケアをし合い、1日をともに過ごすことが充足感や満足感につながっている。

ケアには様々な意味を持つが、共通するのは相手に「時間をあげる」ことである(広井 2011)。小さなくりの木会は、互いに「時間をあげる」ことでつながるコミュニティなのである。利用者もスタッフも、利用者の家族も、小さなくりの木会というコミュニティに所属することで、互いに時間をあげて、時間をもらい共に時間を過ごすことで、くらしに安心感や楽しさを享受しているのだろう。

年齢や病、家族の事情などにより、地域を離れざるを得ない場面は数多くある。また自身の状況によっては、身近な地域では支えられることに遠慮などを感じたりすることもある。しかし、地域を離れても、地域から少し離れていても、戻ってくることができる、受け入れてくれる場所と時間があることは、自分らしい暮らしを続ける支えとなる。歳をとっても、病を患っても、在宅が困難になっても、自分らしい暮らし、社会とのかかわりを持ち続ける方法を小さなくりの木会は教えてくれている。

4. 複層的なコミュニティが支える高齢社会

高齢化が進行し、介護給付金が年々増加する中で、介護保険制度は改正のた

びに在宅サービスや介護予防、地域福祉の方向性が強調されてきた。2011年の改正時には、介護保険制度の持続可能性の確保のために重点化・効率化の必要性が謳われ、地域包括ケアシステムの構築が明確に打ち出された。

国の方針では、2025年を目標年次に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムを構築するとなっている。その中で市町村は保険者として重要な役割を担い、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていくことが必要と位置付けられている。

豊中市では、2017年3月に「豊中市地域包括ケアシステム推進基本方針」を策定し、「誰もが住み慣れた自宅や地域で自分らしく暮らせること」を実現し、将来への安心と希望をつくり出し、私たち一人ひとり・地域・まち・社会のすべてが、明日への活力とともに未来を創造し続けるという「地域共生社会」像を示している。この「地域共生社会」では、以下のような像が目指されている。

地域では新たなつながりが生まれ、「支える人」「支えられる人」の固定的な役割分担でなく、誰もがその人なりのやり方で支え、また必要なときには支えられているという関係があります。上記のような私たち一人ひとりの生活や地域の活動の舞台の集合体として、まちが充実していきます。〈中略〉このことは、従来型発想から未来へと一歩踏み出した一人ひとりの生活・地域・まち・社会の創造をめざすということにほかなりません。（豊中市地域包括ケアシステム推進基本方針より）

これはまさに、小さなくりの木会が体現している、「支える－支えられる」の関係の流動性が目指されている。小さなくりの木会の変わらない活動の中で生まれた関係性は、地域、社会が目指すべき将来の小さなモデルなのである。

豊中市は、小学校区を基本単位とした「福祉なんでも相談窓口」など小地域福祉ネットワークを構築し、その活動での課題の集約、専門職による地域住民活動のバックアップ機能を備えた日常生活圏域（概ね中学校区）7地域（サブも入れると14箇所）を形成する方針である。そして、その7地域には「地域福祉ネッ

トワーク会議」が設置され、市域全体では「地域包括ケアシステム推進総合会議」を設けて3層のネットワーク構造をとる。

ここで少し留意が必要なのは、小さなくりの木会は、豊中市が設定する小地域福祉ネットワークを基盤としながらも3層のネットワークを跨ぐコミュニティであるということである。地縁だけでなく、特定の目的を達成するためのつながりの公だけでもない、複層的なコミュニティなのである。このコミュニティの複層性が今後の高齢社会のケアとまちづくりのヒントとなる。

全国で喫緊の課題となっている地域包括ケアシステムは、中学校区程度を空間的な単位とするとしながらも、都市計画的な発想に乏しく、住まいを中心に、医療と介護と生活支援・介護予防を担う個々の施設が矢印で結ばれたダイアグラムが示されているにすぎず、地域固有の都市構造に即した提案が不足していると指摘されている（後藤 2018）。小さなくりの木会の活動は、北桜塚自治会館という空間に、23年間の「変わらない活動」が展開され、複層的なコミュニティである新たな「居場所」を創ってきた。近年、高度経済成長期に一斉に整備された公共施設が更新時期を迎え、公共施設のマネジメントに取り組む自治体が増えている。公共施設の安易な統合化、複合化には注意を払い、複層的なコミュニティを支える都市像を内発的なニーズから構築していくことが必要である。

また、変わらない活動から生まれた「居場所」は外発的なプランニングで決められたような静的なものでなく、時間の流れの中で変化してきた動的なものである。今後もそうであることを阻まない、まちづくり、社会システムが求められている。

注

- 1 国勢調査：統計局
- 2 日本の将来推計人口（平成29年推計）国立社会保障・人口問題研究所
- 3 ダブルケア：晩婚化や出産年齢の高齢化により、親の介護と乳幼児の子育てに同時に直面し同時進行で担うこと
- 4 研究社 英語語源辞典
- 5 つながりの公：溝口は日本と中国の公の違いを区別し、日本の「領域の公」の共同性とは異なる

る、中国における私相互間の共同の公を「つながりの公」と表現した。つながりの共同の特長は、基本的に民間社会の私的關係にもとづいた共同性であるとする。

(敬称略)

参考文献

綾屋紗月・熊谷晋一郎

2010 『つながりの作法——同じでもなく違うでもなく』 NHK出版。

石塚裕子

2017 「熊本地震における身体障害者の避難の実態と課題——障害者との協働調査より」『福祉のまちづくり研究』19(1): 26-30。

伊藤莉央・小泉朝未・西澤歩未・眞浦有希

2016 『2016年度プロジェクト・ラーニング報告書「小さなくりの木会23年のあゆみ」活動500回記念誌の作成』 未来共生イノベーター博士課程プログラム。

伊豫谷登士扇・齋藤純一・吉原直樹

2013 『コミュニティを再考する』 平凡社。

上野千鶴子・中西正司編

2008 『ニーズ中心の福祉社会へ——当事者主権の次世代福祉戦略』 医学書院。

後藤春彦

2018 「分かち合える価値を内包する都市像をめざして——多様性の保護と包摂」『都市計画』67(1): 30-33。

豊中市桜塚校区福祉会・大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム

2017 『桜塚校区福祉会 ミニデイサービス 小さなくりの木会 活動500回（23年目）記念「メッセージ集」』

豊中市

2017 『豊中市地域包括ケアシステム推進基本方針』

似田貝香門

2012 「防災の思想——まちづくりと都市計画の〈転換〉へむけて」 吉原直樹編『防災の社会学』 東信堂。

広井良典

2000 『ケア学——越境するケアへ』 医学書院。

溝口雄三

1996 『公私（一語の辞典）』 三省堂。